

大丈夫っ!?!?
...じゃない!?!?

FOR ADULT





「大丈夫っ!・・・じゃない!」
2008年 4月 6日発行

◇この本の時点で、アニメの1期が終わってます。
すぐ2期やると出たのでテンション持続してましたが。

◇ここで、新しいソフトを準備したのですが、
時間がないので数コマだけ試しています。
結局、もっと使いやすいのがあったので
今はそっちに変わってますが。







やっぱり
こーゆー時は
コレですね



あ…



仕方ないわね

うん
うん

は…早く
しなさいよね

じゃあ
ヒナギクさん

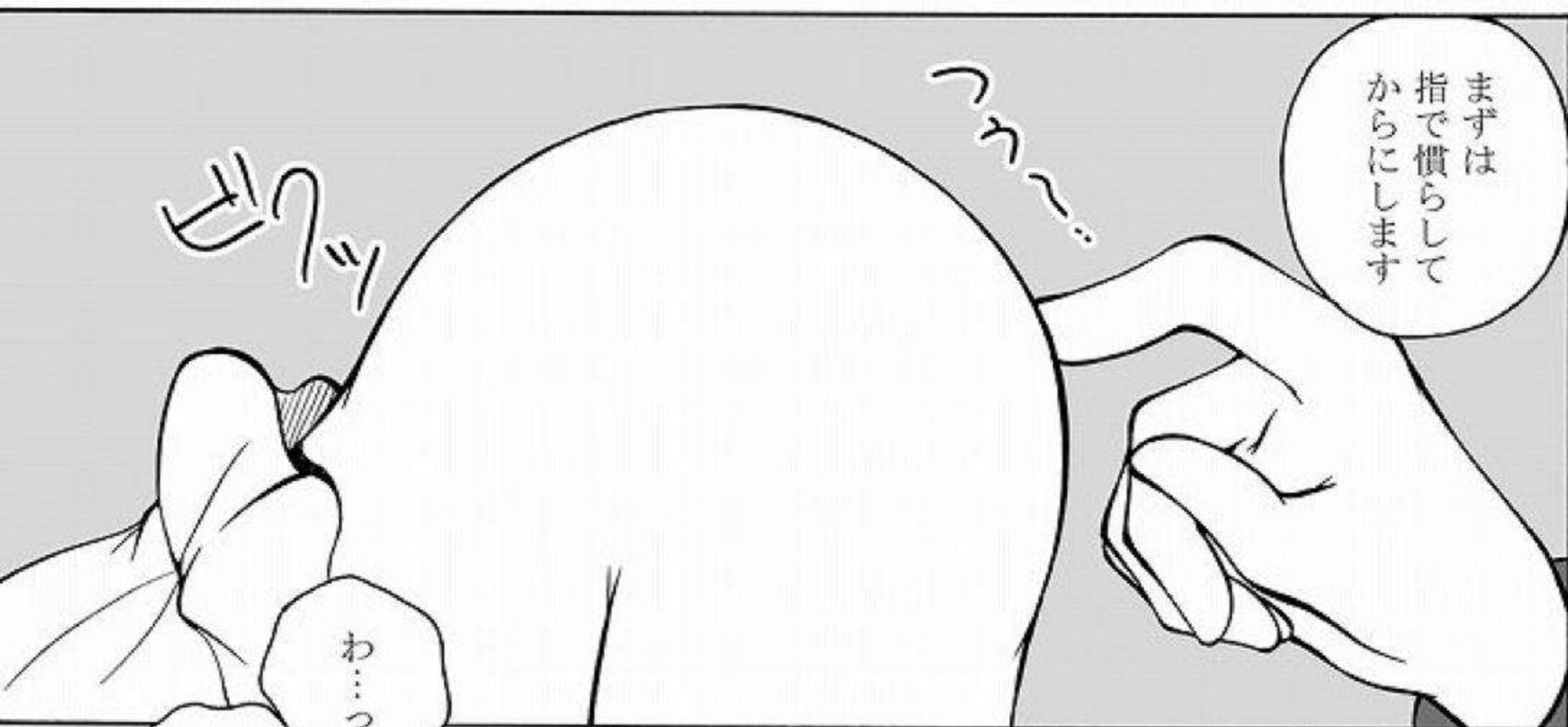
入れやすいように
自分で穴を
掘って下さいね



なっ

そ…
そんなコト
しなくても

仕方ない
ですね



まずは
指で慣らして
からにします

っく〜

ピクッ

わ…っ



ちやんと
自分で
捻げるから

分かった
わよ!



じゃあ
入れますよ

グッ
グッ

あ……っ
向きが
逆でした



イヤなら
ここまでに
しますか

ちよっ
やだ……っ

ひく
ひくっ

えっ!?



ふええ?

仕方ない
ですね
他には…

汗をかけば
熱が下がるって
聞きますし

ひあ

いっばい
注射でもして
汗かきましよう

ああっ

あっ！

んああつ！

熱のせい
ですか？

今日の
ヒナギクさん
ナカまで
すごく
熱いですね

それとも
コレのせい
ですか？

ひあつ

そういえば

ヒナギクさんが
汗をかかないと
ダメですねっ



あつあつ

あつあつ

びん

びん

あつあつ

あつあつ



好きなだけ
動いて
いいですよ



んっ



いっぱい汗
かいて
ささいね！



ふっ



んんん

んんん

たひん たひん

~~~~~

ぬいすいすい

んんん

すいすいすい



だいぶ動きが  
鈍くなって  
きましたけど…

さすがに  
ツラくなって  
きましたか？

でも  
もう少し  
がんばって  
下さいね

あん



せっかくだから  
こっちも  
サービスして  
あげますよ

だだ…  
だめえっ



ガク  
ガクッ

んっ

うく

ぬるるっ

おっ

ひあっ

びり

びり  
びり

ああっ

びり



ぬるるっ

おっ

びり



かなり  
汗かいてきた  
みたいですし

そろそろ  
やめますか？

ふあ



も……もう  
イ……ク  
から……っ！

ぎゅっ  
ぎゅっ  
ぎゅっ

ぎゅっ  
ぎゅっ



やっ  
そんなっ

こんな  
ところ……で

ぬほっ

ぎゅっ  
ぎゅっ  
ぎゅっ





ハヤテくん



風邪  
ひいたん  
ですって？

ハヤテくんにも  
ちやんとコレ  
してあげるねっ

ほらっ  
すぐお尻  
出しなさい

なあ

大丈夫ですよ！  
僕は頑丈に  
出来てますからっ

そういえば  
汗かくって方法も  
あったわね？

ちよっ

「あの……ヒナギクさん？その手に持っていていらっしやるのはいったい……」

ベッドに安穩と横たわっていたハヤテは、ヒナギクが手にしているものを見つけると、全身から冷や汗を流した。

色といい、形といい、大きさといい、彼にはおおいに見覚えのある代物だ。

「あら、わからない？『三千院家特製の座蓐』だって、自分で言っていたじゃない」

思わず見とれてしまいそうなほど可憐な笑みを浮かべると、彼女は通常よりも大きなそれをわざわざハヤテの目の前でちらつかせた。

その光景に、思わず彼は喉を引きつらせる。

『それ』は決して女子高生が嬉々として弄るようなモノではないのだが……。

とつても楽しそうなヒナギクとは対照的に、ハヤテは引きつった笑みをこびりつかせたまま、この窮地をどう切り抜けたものかと、必死に思考力の低下している頭をフル回転させた。

「あ……えつとー、お気持ちだけ、ありがたく頂戴しますの……」

けれど、ハヤテの返答など予測していたのか、ヒナギクは彼の言葉を遮ってまくし立てた。

「やあね、なに水臭いこと言ってるのよ？この前私が風邪ひいたときに看病してもらったお礼なんだから、気にしなくていいのに。ほら、お尻出して？風邪をひいたときには、コレがいちばんなんでしょう？」

笑顔のままのヒナギクがずっとハヤテに迫ってくる。なんかもう、やる気マンマンだ。この状態のヒナギクを止めることは難しい。それはハヤテ自身、身にしみてわかっていた。

看病……じゃないっ!?

鷹宮 沙玖羅

「いや、ですから、僕は鍛えてるので風邪くらい平気ですって……」

それでも、見栄を張ってでも、ヒナギクの『厚意』を謹んで辞退したいハヤテだ。

実を言えば、風邪による発熱のせいで身体中が熱いのだが、そんなことを言えば揚げ足を取られるに違いない。

（あー、ヒナギクさん、この前のこと根にもってるな！）

ハヤテは今さらながらに、過去の自分の行動を悔いた。

彼は先日、風邪で寝込んでいたヒナギクに、不埒な行為を働いてしまったばかりなのだ。

彼女が持つている座薬は、おそらくその際にハヤテが忘れていったものだろう。

「なに言ってるのよ？ ツライんでしよう？ こんなに汗だつてかいて……」

「そ、そう！ 汗！」

ハヤテは彷徨わせていた視線をしっかりとヒナギクに合わせて。暗闇に一条の光を見た思いで、必死にすがりつく。

「汗をかけばいいんですよ！ やっぱり薬にばかり頼っていてはいけません！ 人間の自己治癒能力を信じるべきですよ！」

彼はだるかったのも忘れて飛び起きると、代わりに面食らっているヒナギクをベッドに押し倒した。善は急げ。考える時間を与えては負けだと思った。

「ふえっ!？」

「ヒナギクさん、看病してくださいさるんですよね？ だったら汗をかくのに協力してください」

ハヤテは彼女の制服のスカートを捲り上げると、下着ごとスパッツを抜き去った。

「ちよっ……！ やだっ！」

「黙って、ヒナギクさん」

余裕なく断ると、彼は彼女の唇を奪う。

「んんっ！」

抵抗する腕を押さえつけて、護るもののなくなったヒナギクの敏感な場所に、彼は取り出した自らのモノを押し当てた。すでに屹立して挿入に耐えうるだけの硬度を持ったそれが、柔らかな肉を捉える。

自分がなにをされるのかを悟ったヒナギクが、さらに強く抵抗を試みる。

けれどハヤテは構わずに、無理やり彼女を貫いた。

「っん——っっ!!」

慣らされることなく大質量を受け入れさせられた彼女の内壁がわななき、容赦なく彼の雄器を締め付ける。

「……っ、入りましたね。さすがはヒナギクさんです。ほら、もう濡れてきたみたいですよ。動きがこんなにスムーズに」

彼が腰を前後させると、その動きを助けるようにヒナギクの内部から潤滑液が溢れ出し、シートに滴った。

「ヒナギクさんは濡れやすくて助かりますよ。わざわざ慣らす必要がない。ああ、むしろ無理やり挿れられたほうが感じますか？」

「そんなこと……ひっ！」

ハヤテはヒナギクの弱いところを責めて、言葉を遮った。執拗なほど突き続けられれば、ただでさえ細い隧道がさらに狭まり、ナカの肉棒を圧迫した。

「ひあ……あ、あ……。熱……」

「そうかもしれないですね。でも、ヒナギクさんのナカだって負けないくらい熱いですよ。熱すぎてもう、溶けてしまいそうです」



「あ……、やああつ！」

熱に浮かされて夢中で腰を打ちつければ、粘ついた音をたててヒナギクの愛液が二人の肌を濡らしていく。

ハヤテの雄が最奥を責めるたびに、ヒナギクの隧道は従順に縮まり、彼を悦ばせた。

ヒナギクの肌が薔薇色に上気して艶を増す。

声にも甘さが混じって、ハヤテにもっと先の行為をねだっているようにさえ感じられる。

「ヒナギクさん、イイですよ！ キツくて。もっと締めてください！」

ハヤテは、汗をかいたため、という言葉のもとに、いつもよりも激しくヒナギクを責め立てた。

挿入の回数を追うごとに大きくなる性器を、熟れて過敏になっている腔穴にねじ込んで力づくで拡張する。

熱で朦朧とするせいか、ハヤテ自身、歯止めが利かない。ただ本能のままに少女の身体を蹂躪し、いちばん大切な場所を征服している。

「やっ！ だめっ！ おかしくなるっ！！」

ヒナギクが涙に濡れた瞳で懇願する。

けれど、今のハヤテに聞き入れるだけの余裕など、あるはずもなかった。

「一緒におかしくなりましょう！ もっと壊れて！ 一緒に！」

ハヤテはヒナギクの脚を抱え上げると、高い位置から勢いよく突き下ろした。

その圧力で彼女の粘液が隙間から吹き上がる。

「あ——っ！」

彼が腰を進めるたびに、ヒナギクの背がベッドを軋ませる。

「ふ、深……いつ！ 奥……刺さってえっ！！」

「ヒナギクさんの奥、熱いです！」

逃げ場のないヒナギクの身体は、いつもならば大切に護られている隧道の突き当たりを、無防備にハヤテに晒した。

固く閉ざされている最奥の門を外側から力任せにこじ開けられて、自らの身体の変化にヒナギクは恐怖すら感じた。

「やあつ！ そこはだめえっ！」

侵入を拒むようにキツく締め付けても、濡れきった彼女の内部は、ハヤテの動きを妨げはしない。

そればかりか、何度も繰り返し攻撃された子宮口は、彼の激しい責め立てを受けて、陥落の予兆さえ見せている。

理性の歯止めがほとんど利かなくなっているハヤテは、彼女の変化に気付いていながらも、侵略的な挿入を抑えることはできなかった。

ただ欲望のままに、最後の砦までもを暴いていく。

「ヒナギクさん。すごく締まって……イイですよ！ 僕のをぜんぶ、ヒナギクさんの奥で吞み込んでください！」

ヒナギクの顔が強張る。力の入らない腕でハヤテを押し退けようとする。

「だめっ！ その中だけはっ！ ……あああんっ！」

やめてほしい理性と、受け入れたい願望がせめぎあって、彼女の抵抗を弱めていく。

ハヤテはその一瞬を逃さなかった。

ヒナギクの両脚を抱えなおすと、可能な限りの勢いをつけて、自分の体重ごと彼女の秘部に押し掛かった。それを叩きつけるような勢いで素早く繰り返す。

どろどろに溶かされて充血し、ぶくりと膨れた秘肉がハヤテの雄器にさざなみを与える。

互いの性器が脈打って、もはやどちらの鼓動だか判別がつかない。

「出しますよ！ ヒナギクさんのナカで！ ……出……っ！」

ハヤテの腰に快樂の大波が押し寄せる。

腰を深く差し込み、最奥の門をこじ開けた。

瞬間、大量の熱が放出される。

「ひっ……！ ひあっ、……やあああああ——っ！！」

膣が締まる。呑み込みきれなかった精が二人の隙間から勢いよく噴出され、そのままヒナギクはハヤテを受け入れたまま意識を失った。

「コレなーんだっ？」

ヒナギクは制服のポケットから手を取り出すと、満面の笑顔でハヤテの前にかざした。

「うわっ！ なぜそれが!? さっきぜんぶ処分したはず!?」

そこまで言って、ハヤテはヤバイと手で口を覆った。

微妙な沈黙が流れる。

ヒナギクの手には、まぎれもなく例の座葉が鎮座していた。

「ふーん、やっぱりね。そんなことだろうと思って、ひとつだけ他に隠しておいて正解だったわ」

笑顔が怖い。ヒナギクの目が、今度こそぞったいに実力行使

に出ると主張している。

「…えつとー、ヒナギクさんのおかげで、ちゃんと熱も下が

ったみたいですし…」

「そうみたいね。でもそんなこと関係ないの。私が今、ものす

ごおーく、この特大座葉をハヤテくんのお尻に突っ込みたい気

分なだけだから」

「ひい……っ！」

妖艶な笑みを浮かべたヒナギクが、ハヤテに迫る。

お尻でずるずると後退りしていた彼の背が壁につく。

ヒナギクの瞳がキラーンと輝いた。

彼女はここぞとばかりにハヤテのズボンに手をかけた。

(ひっ……っ！)

「やーめーてーくーだーきーいーっ！！」

ハヤテの悲痛な叫びが三千院家にこだました。

—— 終わり ——

